

ほっ。と エピソード

輝く「しつけ」が創る美

福島市在庭坂の「ぼんさいやあべ」 その盆栽の技を学ぶため、世界中から大勢の方が集います。視察者には棚場の盆栽はほとんど販売をされない不思議な盆栽屋さんです。初代倉吉さんから二代目健一さん、そして三代目大樹さんへと続いていく想いとこだわりの心と技を学ぶ機会を頂きました。今号、次号にわたって特集させて頂きます。(写真はぼんさいやあべの盆栽作品)

盆栽は子育て

ぼんさいや あべの庭には 70 ~ 80 株の盆栽が、棚に整然と並んでいます。さらに、畑には何百もの盆栽素材があり、これらは全て、福島市にある吾妻山を自生地に持つ五葉松を、種から育てたものです。庭に並ぶ立派な盆栽を目にした人々は、山から採ってきた松ではないことを知ると、「信じられない」と口にします。それほどまでに、一鉢一鉢が堂々と、まるで数百年の時間をその身に刻んだかのようにそこにあるのです。

盆栽は基本的には三角や丸い整った形に作るのが一般的です。しかし ぼんさいや あべの盆栽は一般的なそれとは異なります。彼らが3代にわ たって目指しているのは、吾妻山の山に溶け込めるほどに自然に近い姿の盆栽です。

ぼんさいや あべに初代から受け継がれている盆栽への想いとこだわり を表すエピソードを、二代目健一さんが語ってくれました。

二代目健一さんが初めて東京に盆栽の展示会に行った時のこと。形よく綺麗に整えられ立ち並ぶ盆栽に、衝撃を受けたそうです。日本最高峰の展示会に出品されていた松の中で、自然を切り取ったような作風の盆栽は、ぼんさいやあべのものだけでした。健一さんは、福島に戻るとすぐに整えられた松を真似て、ハサミを入れ、盆栽を作り始めます。しかし、その仕事ぶりを見た初代倉吉さんは激怒しました。その時の言葉を、健一さんは今でも胸に刻んで盆栽づくりをしているといいます。

「盆栽を見て盆栽を作るな! 俺たちには恵まれたことに吾妻山がすぐ近くにある。こんな恵まれた環境にいてお前は何をしているんだ!」

盆栽は、自然に学ぶもの。人の真似をして作るものではない。それ以来、 健一は一切、 ぼんさいや あべの作風にそぐわない盆栽は育てていません。

ぼんさいや あべが目指すのは、樹齢何百年の吾妻山の松を人間の手をかけて鉢の上に表現すること。風雪にさらされ、雨にうたれ、自然の厳しい環境の中でたくましく育っていく。その姿に人は感動を覚えます。それを盆栽でどう表現するか。「盆栽育ては、人育てにも通じる」。ここに人間の教育にも通じるポイントをみることができました。

盆栽を育てるときにぼんさいや あべが大切にするのは幼い頃の「しつけ」です。健一さんは、種から芽が出て4、5年のうちにその松の数十年後、数百年後の姿を考えます。真っ直ぐに伸ばそうか、根上りをさせようか、横に貼った姿にしようか。幼いうちからその木の特徴、良し悪しをしっかりと見極めて、その木にふさわしく、その木が一番自然らしい形を考え、樹形構想を立て、その通りに育つようにしつけをしていきます。盆栽でのしつけとは、針金を巻いて固定し幹や枝の矯正を行うこと。まだ若くしなりのある枝に針金を巻き、自然のらしさの「ふり」をつけていきます。人の手で自然の厳しさや美しさを作り出すのです。

ただこのしつけは大きくなってからも続けるわけではありません。一つのしつけはおおよそ1年から2年。健一さんは、この針金をとった時にこそ、盆栽の美しさが高まると言います。しつけを外され、ふわりと枝を広げる盆栽こそ自然で美しい姿だと言います。

そして、厳しくしつけた盆栽には、愛情を込めて水やりをします。健一さんや三代目大樹さんが、国内外に盆栽の講師として呼ばれ家を開けるときには奥さんをはじめとするご家族が、雨の日をのぞいては一日も欠かさず水をあげます。盆栽の水やりがあるから、ゆっくり旅行にもいけないと語る奥さんも、その表情は優しく微笑んでいました。倉吉さんから三代、受け継がれた厳しいだけではない、その奥にある愛情あふれる想いが家族全員にも伝わっていることがわかります。

厳しいしつけは、その子が最も力強く、美しく映える姿にしようとする想いから。そして、ただ同じしつけをするのではなくその子が輝くにはいったいどんな姿が美しいのかを幼い頃から考えぬいて導くしつけは教育の鏡。ただ厳しくするのではなく、その人の数年後、数十年後まで見据えて考えぬく、社員教育にも通じる道がみられます。

地域と自然への想いからはじまった盆栽屋

初代倉吉さんは、元々皇居での剪定もしていた凄腕の盆栽作家でした。 その倉吉さんがなぜ都心を離れ福島で「売らない盆栽屋」を始めたのか を健一さんが話してくれました。

昭和初期、倉吉さんはこれから世の中が、どんどん安定に向かうだろうと考えていました。人々の暮らしにも余裕ができ、趣味の時間も出来るかもしれない。これから盆栽ブームを迎えるに違いない。

ただそれだけであれば嬉しいことであるのですが、倉吉さんには危惧することがありました。 (→次ページへ続く)



半田真仁 (はんだしんじ) 一「採用と教育研究所」所長

企業、自治体等の採用と教育を手がける。 福島県を中心とし、地元の中小企業から 上場企業まで「仁財育成」のサポーターとして定評が ある。笑いが溢れ楽しく役立つ講演は学生から経営者 まで幅広い層に人気では全国を駆け回る。

それまでの盆栽は山から採ってきたものから作るのが主流でした。しかし これからブームを迎え多くの人が山に盆栽を取りに行くようになると大切 な自然が荒れてしまう。盆栽は自然の姿をいかに表現するのかを考えてい た倉吉さんにとって、盆栽が山を荒らすということはまさに本末転倒。こ れをなんとか食い止めたい。

そこで倉吉さんが考えついたのが、盆栽を吾妻山の五葉松の種から育て るという方法でした。在庭坂の畑で種から育て始めその技術は惜しみなく 地域の人々へと広めて行き、地域にはたくさんの盆栽屋が生まれました。

そして今からおよそ40年前、日本に盆栽ブームがやってきます。 丁度同じ時期、農業で生計を立てるのが困難になります。他の農村部から は、働き手が都市部へ出稼ぎに行かざるを得ない中、在庭坂には毎週末観 光バスが訪れるなど、倉吉さんが伝えた盆栽で、潤いがもたらされました。

その功績を後世に伝えようと地域の人達、全国のお客さんが共同で建立 した「阿部倉吉翁頌徳碑」が今も同地域に残っています。

(次号に続く)



初代倉吉さんの話を懐かしげに語る二代目健吉さん



地域に立てられた碑(福島市奥庭坂)



二代にわたって育てられている盆栽作品

採用と教育 河ドラマデビ

~国民的大河ドラマの裏側に見たプロフェッショナリズム~

福島が舞台となる2013年のNHK大河ドラマ「八重の桜」にエキストラで出演 させていただきました。

さすがは大河ドラマ。エキストラである私たちにも、本格的なメイクをしていき ます。特に驚いたのはカツラ。元の髪の毛もうまく使いながら境目がわからない ほどに、肌によく馴染んだカツラをつけてくださいました。

撮影場所は福島県会津若松市にある鶴ケ城。登城する会津藩藩士の役をい ただきました。

実際に放送に使用されるのはものの数秒ですが、撮影には5時間以上の時 間がかかりました。足元のみの撮影から、遠く離れた場所から全体の撮影、頭上 からの撮影など、様々なアングルから撮影を行われたためです。カメラワークー つをとってもこのこだわり。

音響にもこだわりがみられました。音響スタッフは足音の録音のため、自身の 足元にマイクを向け、納得が出来る音が取れるまで何度も何度も走っていまし

これらが決して「自己満足のためのこだわり」ではなく、作品の良さの追求、つ まり視聴者の皆さんに楽しんでもらうためのものであることが、撮影時の周囲の 皆さんへの気配りから感じることができました。

登城シーンに使われたのは、鶴ケ城内の一般の方々も通行できる道。撮影日 でも封鎖するようなことはせず、大勢の観光客や地元の方がその道を通られま した。

現場では、警備員の方を撮影場所の両脇に配置し、歩行者の方が来ると、そ の都度撮影を中断。時間が限られている中でも、自分たちよりも地域の皆さんを 優先する思いやりのある現場で撮影が行われていました。

こだわりと地域への思いやり。これこそが、大河ドラマが半世紀国民に愛され てきた秘訣であると学ぶことができました。

大河ドラマ「八重の桜」は、2013年1月より放送開始。舞台となる福島で は、八重関連の展示などイベントも多数予定されています。 これを機会に是非福島に遊びにいらして下さい。



会津藩士に扮した吉川屋若旦那畠さん(右)と採用と教育 清野

ほっ。と

人には、人それぞれの人生があり 100人いれば、100通りの歴史や 物語があります ここでは、そんな数々の人物の中から

世界に誇る

日本のものづくり

-誇りある職人芸 世界一の砲丸ー



有限会社辻谷工業 辻谷政久

埼玉県富士見市にある小さな町工場。従業員数6名。このどこにでも ありそうな小さな製作所が、世界の注目を集めています。

辻谷さんが砲丸作りを始めたのは、1968年。今から40年以上 も前のことです。当時、一般男子用の砲丸は7,260グラムよりも 軽くなければ良いという大雑把なものでした。日本の砲丸作りに大き な転機が訪れたのは1983年、日本陸連が国際規格の採用を決定。 国際規格は直径が 1 2 5.2~1 2 5.8 ミリ。重さの誤差が 5~2 5 グラム。100グラムくらいの誤差は、どうでもいいという世界から 誤差は25グラム以下と厳格化されたのです。

「そんな砲丸とてもじゃないけどできない」「できるかもしれないが 採算がとれない」と、同業者は次々に辞めて行きました。そして、そ のしわ寄せが辻谷工業へと押し寄せ ます。それまで年間300~4 00個だったものが1年も経たずに3,000~4,000個の注文が 入るようになります。しかも、砲丸作りはあまりにも難しく100個 作れば30~40個も不良品がでるのです。

辻谷さんは、よい製品を作るにはまず材料のことを知らなければと 鋳物屋に約1年半修行へ出ます。そこで「毎月作るマニュアルがもう 翌月には通用しない」ことに気付きます。それは季節の違いでした。 冬では、夕方に鋳造した品物は、翌朝には冷たくなりますが、夏の時 期には300~400度も熱があるのです。気温や湿度によって玉の 密度に違いが出る。それからは、自分の加工マニュアルは一切破棄し、 勘を頼りにします。

コンピュータで数値を制御する NC 旋盤を使ってみたこともありま した。コンピュータで作りますから見た目はとてもきれいにできます。 ところが重さを量ると、なんと70%が不良品だったのです。辻谷さ んが原因を調べると、鋳物には、鉄のほかにシリコン、カーボン、マ ンガン、リン、硫黄と最低でもこの5つが入っています。そしてそれ ぞれ密度が違うため、固まるまでに軽い物質は上に、重い物質は下に できあがった品物の右左で重さの違いがでてしまうのです。そ れに気付いた辻谷さんは、なんとその重さの違いを手で感じ取りなが ら砲丸を作ることにしたのです。

オリンピックで使われる砲丸は、選手のマイボールではなく世界各 国から選ばれた5~6ヵ国のメーカーの製品です。選手はその中から 使う砲丸を選ぶ。辻谷さんの砲丸は、1988年のソウル・オリンピッ クで初めて採用されます。他の国の砲丸は、赤や黄色とカラフルでし たが、辻谷の砲丸は、削った鉄色のままでした。

過去のオリンピックで使われたことがある砲丸を辻谷さんは7ヵ国 から取り寄せ、全て2つにカットしました。すると、中に鉛が詰まっ ている物や空洞の物など、重さを合わせるために細工を施した物ばか りでした。手を加えた跡を隠すため塗装をする。すると、余計に砲丸 の重心が狂ってしまう。それを知った辻谷は、絶対に色は塗らないと 決めていたのです。

そして、いよいよオリンピック。しかし、辻谷さんの砲丸はどの選 手からも選ばれませんでした。「鉄の色が飛びそうに見えなかったのかも」と笑いながらも「スポーツで言えば完敗」と辻谷さん。

次に考えだしたのは、砲丸の表面に深さ20分の1ミリほどのごく 浅い筋を刻んだもの。掌紋と筋がぴったりと馴染んでとても投げやす い砲丸です。1992年、バルセロナ・オリンピックにはこれを提供 します。ところが、練習用に置いてあった16個の砲丸が全て紛失。 選手がこっそりもって帰ってしまったのです。競技には間に合いまし たが、オリンピックが終わると追加した16個も全て紛失していまし た。



汎用旋盤で回転させている辻谷工業の砲丸。この機械で手の感覚だけを頼りに砲丸が作られる

アトランタでは、この砲丸が金・銀・銅を独占。それどころか、 決勝に残った8人全員が、辻谷さんの砲丸を使ったのです。シドニー でもメダルを独占。次のアテネでは、筋入りの砲丸が禁止されてしま いますが、今度は表面を研磨した砲丸をアテネに送り込み、またもや メダルを独占します。

「加工というのは奥が深いですね。それまで僕は鋳物で言えば、ずい ぶんいろんな種類の加工をしました。しかし、今までこんな苦労は一 回もしたことなかったですよ。図面どおりに削る。砲丸の場合は、図 面がないから余計に難しい。うまくいかない場合は、もう突き詰めて 根本まで研究していかなきゃできないということが、やってみてわ かったんです。」と語る辻谷さん。

その後、2004年には「ニッポンモノづくり賞」、2005年に は「現代の名工」など数々の賞をうけることになる。

参考資料: DIAMOND online



事業の多角化も時には大切でしょう。

でも、

今手がける分野に気概を持ちづつける姿勢が

分野

を

か

り

やること

結果は同じです

辻谷工業様が紹介されています こちらもぜひ一読ください

「ちっちゃいけど 世界一誇りにしたい会社」 (1,500円)

著者:鈴木光司 ダイヤモンド社

3

続けるのです。改善を重ねて生まれたモノには、

本物の価値が見えてくるんです。

そしてナゼナゼと自分に問

いかけ

八が困っている時には、

その要因を探ることが大切です。

2

が

木

7

る

کے

に

が

る

うかが大切なんです。

代 葉 に

「時代の言葉」には将来のヒントがあります。NC旋盤があれば寸法が正確な砲丸は作れます。 外見から重さや重心は測れません。 自動化・効率化を謳う時代の言葉と、どう向き合

が あ への3つのヒン

下村さんがチーム息吹を結成したきっかけは、福島県南会津の観光振興について思い悩む中で、地域に生きる人達が地元に誇りを持てていないと感じることが多く。観光をはじめとした地域活性化には、まずは自分たちが住む街を愛し、誇りに思えることが大切ではないかと考えるようになったそんな時、沖縄で平田大一さんと出会い、地域の伝統文化を取り入れ子どもたちと共に創りあげる新しい形の舞台「現代版組踊」の活動に、下村さんは、深い感銘をうけました。

現代版組踊では、子どもが地域活性化の一員として自覚と責任を持ち、 感動のパフォーマンスをしていました。なおかつその題材が、地元の歴 史と文化を体感できるものでした。

「子どもたちはとても素直に自分たちの地域を見つめることが出来て、 大人たちが掛ける言葉次第で、地域の事がとても好きになったり 逆に嫌いになったりするんです」

下村さんは、この取り組みが地域に誇りを持った人材の育成につながると平田さんの活動を参考に福島県南会津にて活動をスタートします。

息吹において、舞台はあくまで目的ではなく手段。目的は子どもたち の成長、それに伴う地域、日本の振興です。

子どもたちが、社会に出て困難にぶつかったときに、自分でどうした ら良いのかを考える力、その困難を乗り越える力もつけてもらおう考え ています。そのために息吹では舞台作りを通して小さな成功体験を積み 重ねることができるプログラムを組んでいます。

例えば約束を守り時間を大切にするということについて。6時から稽古が始まるというのに、30分遅れて来る子どもがいる。この時に「6時に来ない」と叱るのは簡単です。しかしそうではなく、息吹では6時から6時半の間を一番楽しくしようと考えます。子どもたちは、その30分間が楽しいことを学び、早く来た人は得をするというような成功体験をします。ただ叱られたからでは、やらされた感覚になってしまう。そうではなく、自分たちに良いことがあるということを感覚としてわかり、自然にできるように導きます。

その体験は、子どもたちの間でも広まっていきます。今、子どもたちの間では一生懸命がかっていいという想いが定着しているといいます。物の片付け、準備でも、走って我が先にと上の年齢の子どもたちがやる。そうすると下の子どもたちもそれを真似ていく。「やらされている」感覚ではこうはいきません。

チームに大人が押しつけるルールを設けていないことも特徴的です。 大人は子どもの活動をルールで縛りがちですが、息吹では自分で気づく ことを重視しています。稽古はもちろん、舞台に参加するかも自由参加 で、会費も一切なし。だから、次の公演に果たして全員が来るのかもわ からないシステムです。しかし、それが4年間も続いている。信頼だけ で成り立つ新しいコミュニティが作られています。

この信頼関係は、大人の生きる姿勢から生まれています。

「大人も常にチャレンジをしています。『やると言ったらやる』という ことを大人の背中で語るんです。」

2012年3月の沖縄公演では約一千万円の費用がかかることがわかりました。周りの人たちは、その金額に実現は難しいだろうと思っていました。しかし、日頃から子どもたちには「お金で諦めるな。想いがあれば絶対に実現する。そのためには自分が出来る事を考えて行動しよう」と伝えてきた下村さんは、決してお金で諦めるわけにはいきませんでした。費用を集めるため、スポンサーのお願いに沖縄の企業を直接訪問。

下村さんの熱い想いに心打たれた、スポンサー企業は、他の企業の紹介までしてくれ、結果、全部で67の企業がスポンサーになってくれました。さらに、その繋がりで80万円近くかかる会場諸経費をはじめ、舞台装置の航空運送費用、メンバーの移動についても支援してもらい、結果、見事沖縄公演を実現させることができました。

出来ないことをただ出来ないというのではなく、どうすれば出来るのかを考えて、それを実現していく。その姿勢を大人が実行しているからこそ、子どもたちから心からの信頼を得ることができているのだと思います。

また、そんな大人たちの姿に、子どもたちに、自己決定の力と、それに伴う責任感も芽生えています。子どもたちの中には、「本当は他の都市部の学校に進学を考えていたけど、他の街の学校に行ったら息吹ができなくなるから」という理由で、地元の高校を選ぶ子どもたちが出てきました。15歳の子供にとって、高校を変えるというのは、人生を変える決断。下村さんはこの言葉から、息吹という活動を通して子どもたちの成長に貢献し、この活動を継続しなくてはと、やる気スイッチを入れられたといいます。

舞台は成長と感謝の気持ちを表現する場所だと下村さんは考えています。チャレンジし成長する気が見られなければ、何度も同じ舞台をする意味もありませんし、支えてくれる皆さんへの感謝の気持ちを忘れてしまうようであれば、この舞台は成り立たないので、その時は舞台をキャンセルしようと子どもたちと約束します。子どもたちは、信じて見守ってくれる保護者やチケットを買って会場に足を運んでくれるお客様の期待を超えて見せようという想いと向上心から、自分たちで台詞や言い回しを工夫して必ず成長を見せます。

その姿勢は本番でも現れ、突然のアドリブもあるそうです。大人たちは舞台のバックで舞台音楽の演奏をしているのですが、アドリブのセリフが入ると曲の長さを変えなければならないことも。一秒たりとも気は抜けません。舞台上で繰り広げられている子どもたちとの真剣勝負から、子どもが、しっかりと一人前のパートナーとして成り立っていることが分かります。

地域を愛することは、人間としての根ができることにも繋がると下村さんは考えています。息吹では、自分たちの地域の歴史や文化を、自分たちで演じることで地域のことを好きになったり、考えたりできるようになっていきます。そうして出来た根のある人間が、社会に出ると、例えばネジー本を作るにしてもただ作るのではなく、思いを持って真剣に働くことが出来るようになる。それが、日本を元気に、そして自分たちの会社も元気にしていくことにつながっていく。

実際に見た人たちの感想には、舞台が良かったという感想はもちろん のこと「今の自分はこの子どもたちのように、毎日真剣にやっているのか?」など、自分に問い直すきっかけとなったとの声も多く聞かれるそうです。

どこにでもいるような普通の子ども達が舞台という今まで経験したことがない分野にチャレンジし、一生懸命活動してきた結果を見て欲しいと言う下村さん。子どもたち自らがやる気をだし活動する環境を作ってあげればどんどん成長します。人がこんなにも成長する姿。福島で芽吹く未来への息吹を見て、次世代が未来を開いていく鼓動を感じて、仕事への姿勢を見直すきっかけとしてみてはいかがでしょうか?



福島市初上演決定

日程:2013年3月26日(火) 場所:福島県文化センター大ホール http://www.minamiaizu.jp/ibuki.html

編集後記 ~働く上で大切なこと~

採用と教育で研修させていただいている清野和也です。採用と教育では大勢の皆さまと関わる機会を頂き、その中で、沢山の自己成長の機会を頂いています。

働く上で何が大切なのか、言葉にして教えてくださる方もいれば、そ の背中で語ってくださる方もいます。皆さんに共通して教えて頂ける大 切なことは、「企業理念」を考え、行動するという事です。

学生の頃は企業理念というものを意識したことがありませんでした。 しかし、本当に大切なのは「理念」であることを学ぶことが出来ました 。なんのために働くのか、道標が示されているのが理念です。研修では 理念に沿った人間的、社会的成長の場を、本当に沢山頂いています。

そして、その理念を念頭に置いてお客様に対してはもちろん、一緒に 働く仲間たちにどうすれば喜んで頂けるだろうかと考え続けることが大 切だと学ばせていただきました。さらに、そのことを自分も楽しみ喜ぶ ことが出来るように自分から行動していく。

採用と教育の理念は、「思いやりあふれる全員経営」。どんなお仕事でも意識すれば思いやりの行動、そして経営の視点で見ることができる

ことを学ばせていただいています。

半田代表がたびたび「会社は灯台のようなもの」と表現します。強い輝きを放つ会社さんほど、足元が見えづらくなっていきます。その足元を私たちがしっかりと照らしていくことで、皆様の会社がもっともっと大きくなることができる。そうして喜んでいただきながら、お客さま、スタッフの皆様、地域が豊かになる。そんな福島から日本に良いニュースなっていく事を信じ、皆様のお力になれるよう成長させていただきます。ご指導のほど、よろしくお願い致します。

発行 / 採用と教育研究所

〒960-8053 福島市三河南町1-20 コラッセふくしま6F

 $TEL\ /\ FAX: 024\text{-}529\text{-}5153\ E\text{-}Mail: info@saiyoutokyouiku.com}$

HP: http://www.saiyoutokyouiku.com/

[Spacial Thanks] Support: Hiroko Aihara / Photo: Takao Horiuchi